



# JSPS London NEWSLETTER

No.60  
2019 Summer



Regent's Canal, London : Photo by Fuki YOKOYAMA

## Contents

### <Japanese Articles>

- P01. 巻頭特集  
「JBUK 第3回英国サバイバルセミナー」
- P05. センター長の英国日記  
⑫「まっとうな“暴言”2: 報道のあり方、男女参画の不平等、  
少子化、叱れなくなった日本」
- P09. 在英研究者の者窓から  
第19回 Imperial College London 小野 昌弘
- P11. 英国大学の今  
「プレクジットは英国の大学に何をもたらすか(3/3)」
- P12. ぼりーさんの英国玉手箱  
「英国の四季のイベントについて教えてください」
- P14. 山田さんの徒然なるままに  
第7回「鍵師になろうかな」
- P16. Recent Activities  
「JSPS-CRICK SYMPOSIUM ON GUT CIRCUITS」

### <English Articles>

- P18. Voice! from Alumni member  
Vol.15 Professor Timon Screech
- P21. Recent Activities from Alumni members  
“First partnership for Lancaster University with a  
Japanese University”
- P22. Events organised/supported by JSPS London
- P23. JSPS Fellowship Programmes & International  
Collaborations Application Schedule

## 巻頭特集

## 第3回 英国サバイバルセミナー

巻頭特集

2019年6月20日に第14回在英日本人研究者会議 (JBUK=Japanese researcher's network Based in the UK) である「第3回英国サバイバルセミナー」を開催しました。

今年も40名以上の日本人研究者が集い、研究者としていかに生き抜くか、真剣かつ有意義な話し合いが行なわれました。



参加者全員での集合写真

2019年6月20日(木)16時より、第14回在英日本人研究者会「第3回サバイバルセミナー」を、昨年に引き続き激動の英国でサバイバルをする研究者が今後世界でいかに生き抜くかを大きなテーマとして開催しました。

## ・日英科学技術動向の紹介

まず、日本と英国の政府による学術動向を知るため、「英国の科学技術政策動向」として国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)より、研究開発戦略センター(CRDS)海外動向ユニットの山村 将博さんが英国の科学技術動向についてお話くださいました。基本的な予算規模や科学技術支援のあり方から、グランド・チャレンジやカタパルトプログラムといった最新の産業界を巻き込んだ政策についてもお話くださいました。

続いて、「日英科学技術政策とその方向性について」を在英英国日本国大使館の小川 浩司一等書記官が説明くださり、ブレグジットによって混迷を極める英国との科学技術協力の今後についてお話くださいました。

英国の学術界は、ブレグジットによりEUとの関係を新たに模索する必要性に迫られる苦しい局面であるとともに、EU外の国との科学協力を積極的に推進する必要があることも自覚しており、日英大学間での取組みが非常に活発化している。

継続して質の高い研究を提供できる日本は注目されており、共同研究の量をどう増やすかが互いの関心事項であるという指摘がありました。



山村 将博氏(JST・研究開発戦略センター(CRDS)海外動向ユニット)

小川 浩司一等書記官(在英英国日本国大使館)

## ・パネルディスカッション

今回のパネルディスカッションは、テーマを「英国でのキャリア形成について」として、伊藤 義文先生(University of Oxford)、小黒・安藤 麻美先生(University of Exeter)、小舘 尚文先生(University College Dublin)の3名にお話を伺いました。ファシリテーター(司会進行役)はJSPSロンドンセンターの上野 信雄センター長が務めました。



## 第3回 英国サバイバルセミナー

## ー パネリスト紹介 ー

伊藤先生：University of Oxford で Associate Professor and Principal Investigator Cell Migration Group として、組織破壊のメカニズムを研究。米国でテクニシャンをしながら PhD を取得し、そのまま米国で研究を続けたかったものの、ビザの問題もあり、日本からの助手のオファーを受けることに決めた。4年間日本で研究をして、2001年に英国からオファーがあり渡英。英国で働くとは思っていなかったが研究環境や風土にひかれてそのまま滞在し、18年間英国にいる。現在は東京農工大と共同研究を行っている。

小黒-安藤先生：University of Exeter の College of Medicine and Health で Lecturer として 自閉症の神経分子メカニズムを研究。在英は3年弱。日本で PhD 取得後、アメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校でポスドクをしていたところ、同じく研究者で、理論宇宙物理を専門とする配偶者がオランダでテニュアトラック職を得たため、ポスドク職を得て一緒に行く決断をした。その後、パーマナント職をオランダで探したものの、オランダの医学部では教育(ティーチング)をオランダ語で行うことが求められていたため断念。オランダから近く、英語で授業が可能な英国でパーマナント職を探し、現在に至る。日本とは理研や東大、東京理科大学などと共同研究、学生派遣や受け入れ等を行っている。



左から 小館 尚文先生 (University College Dublin) と小黒-安藤 麻美先生 (University of Exeter)

小館先生：アイルランドの University College Dublin で、Associate Professor として、社会福祉に関するテーマで研究している。PhD を政治学(LSE)で取得し、NIHR の社会科学系研究所で時限研究員ポストを経て、2012年から University College Dublin へ。テニュアをめざして申請し続けていたら、アイルランドにたどり着いた。イギリス歴は8年半、アイルランド歴は7年。2019年6月に Associate Professor に昇進したばかり。

り。トヨタ財団の PI として介護ロボットの社会実装をアイルランド、日本、フランスと香港の研究者と行っている。

以下パネルディスカッションの内容の要約となります。

～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～・～

## 【英国でのキャリア形成において注意すべきことはあるか？】

伊藤：英国でだけの話ではないが、35、6歳までに自分の仕事(強みとなる部分)を確立しないといけなと、教授からのアドバイスがあったのをよく覚えている。自分の分野で、キーとなる業績を35、36歳までに確立し、磨き上げることを目指すと良い。

小黒：ポスドクから先の職に応募するとき、ロンドンやオックスフォード・ケンブリッジ周辺にしか応募しないという人が多いように思う。それらの大学は競争率が高く、ポストを得にくいので、場所を限定せずに視野を広げて考えると良い。

また、ポスドクでの研究成果を重視されることが多い(博士課程の論文は考慮されないことがある)ことを注意しておくが良い。Lecturer として採用されると教育に割かれる時間が非常に多くなるので、自分の研究室立ち上げ時には Fellowship をとった方が自分の研究に専念でき、自分のグループを確立していく上で有利だと思う。

小館：大学では(理工系にあわせた)フレームワークが標準化され、色々な縛りがある。研究面ではインパクトファクターが強く求められる。外国で職を得た際、日本で積み上げてきたキャリアやネットワークをどう活用するか考えることが大事。講師から准教授へ「次のポジション」へいく壁は高いと感じた。

小黒：ポスドクの中に、できれば各大学で行われている Academic Professional Programme などの資格(大学院生をティーチングするための資格)を取っておくと、就職の際にも有利に働き、実際自分の研究室を立ち上げる際にその資格コースの受講を免除されるので、役に立つ。日本の就職活動では、インターネット上よりも分野内での情報収集・共有が多い印象。個人的なネットワークがない場合、チャンスも少なくなってしまう。英国の場合は、応募もネットに掲載されるし、セレクションのプロセスが公平。個人的なコネクションが少ないと思う人の場合は、イギリスの方がチャンスがあるかも。

## 第3回 英国サバイバルセミナー

会場から:

・カウンターオファー(こちらからの要望や提案)の重要性を認識しておくべきだった。職に就く際に、その後のライフイベント(結婚や出産における変化・ビザの問題)についても交渉できるところはしておくべき。

### 【グラント(研究費)や Fellowship (研究を行う機会／生活費付き)について】

小黑: イギリスではグラント(100~500K規模)の採択率は5~10%と非常に低い。しかし、チャリティ系(10Kくらい)のグラントが多くあるし、分野が絞られているのでチャンスはあるはず。小さいグラントでも積み上げていくことが大事。当初イギリスのグラントの書き方を知らなかったのが苦労した。米国やオランダはリスクかつチャレンジングなゴールを好み、「夢」をかかないと採用されない傾向が強かったのでそういう風には書いていたが、途中で英国は固い、実現可能なゴールを書かないと採用されないことに気がついた。そういう意味では日本と傾向は似ているかもしれない。

小館: 規模の大きさに拘わらず、グラントには恐れずに出ていくようにしたい。小さな額であってもファンディングを得る姿勢を(大学へ)見せていくのも大事。経験も人脈も増えていく。

伊藤: 英国はチャリティグラントの存在が特徴的。チャリティのプロジェクトグラントでは3年間で300kまでのグラント規模を申請できる。(UKRIだと500k、大型の研究支援であるプログラムグラントだと5年間で1.5m以上が可能)グラントの選考はまず外部の専門家の研究者たちが審査する。レビューからショートリストが作成され、レビューを参考にパネルメンバーで最終的な選考が行われるが、パネルメンバーの顔ぶれで採否が大きく左右される面があり不公平。また、ポスドクの独立資金としての Fellowship は一番の近道であり、種類としては充実しているが、競争率は高い。それぞれの段階での Fellowship がある。応募の段階でその人がどんな人なのかにより判断されることがあるので、人間関係構築は非常に大事。

会場から:

・ひとつのグラントが取れなかったときに生き残れるポートフォリオが必要。大仰な展望よりも実現性を重視される傾向があるのは間違いない。なるべく簡単に、わかりやすく書く。  
・ポジションを獲得するためには軌跡が大事。PhD 取得後の



伊藤 義文先生 (University of Oxford)

キャリアの伸びが重視される。独立した研究であるか、研究のオリジナリティを強調できるかが勝負。

小黑: 「学位取得後10年以内」等の制限のあるグラントについては、出産や育児による中断は考慮してもらえる場合がある。私個人の体験ではあるが、上記の期限付きのグラントへの申請時に、こどもが水疱瘡になり、とても期日までに提出できないので諦めると同僚に言ったところ、「直接交渉すべきだ」と、助成機関への連絡を薦められた。その結果、育児による事情ということで次年度の応募を特例で認めてくれた。男性でも育児休業などを取得していた場合は考慮されるそうなので、そういった面は日本よりもかなり融通が利く良い体制であると思う。

### 【共同研究相手をどのように見つけ、信頼関係を築くか】

伊藤: まず向き合って、お茶を飲んで、人間関係を築くところからはじめるようにしている。共同研究者になるということは、互いに相応の責任が生じる。興味の方向性が一致しているかを見極めることが大事。当然、自分のキャパシティには限りがあるので、リサーチグラント、プロジェクトグラントの場合は他のエキスパートと協力することが必須となる。

小館: 実体験としては、日本の総務省も絡んだ日欧ジョイント Horizon2020 に EU の研究者と共同でアプライしたが、欧州内研究者の間で、ファンドを獲らなくてはという意気込みが強すぎて競争になり、空中分解しそうになった。結果は、不採択ではあったものの、そのときのメンバーとは関係を構築しなおして現在でも交流があり、この申請がきっかけで、千葉大学の先生方と中心に、現在、共同研究も行っている。

## 第3回 英国サバイバルセミナー

会場から:

ネットワークを築くアイデアとしては、学会等に参加した際に、必ず毎回質問する、プログラムを作る際に参加するなど、その分野でのコネクションを広げることができる。

~~~~~

以上がパネルディスカッションの要約ですが、昨年のサバイバルセミナー同様、全体を通して、とても活気のある、有意義な会合となりました。また、続く交流会でも予定時間をオーバーしてもまだまだ話したりないほどに盛り上がりました。若手参加者からは「とても励みになった」「これから頑張ろうと思う」という感想が聞かれ、シニアの研究者からは「これからも JSPS ロンドンに協力できることがあれば」と嬉しいお言葉を頂戴しました。最後に、パネリストをお努めいただきました先生方および上野センター長より、コメントをいただきましたので掲載いたします。

## ◆伊藤 義文 先生◆

今回は英国のグラント関連のトピックスを中心にかなり活発なディスカッションが行われました。特に若い世代の方達には、普段疑問に思っている、周りの誰に聞けば良いのかわからないようなことを聞ける、良い機会になったと思います。JSPS ロンドンには、これからもこのような会を定期的に設けていただけることを希望いたします。これからも在英日本人研究者のサポートをよろしくお願い申し上げます。

## ◆小黒-安藤 麻美 先生◆

今回はパネリストとして参加させていただきましたが、会場には多くの先輩方がいらっしや、様々な助言を下さったので、私の方が結果的に多くのことを学ばせていただく形となりました。また、女性研究者の方々と直接お話をさせていただきましたが、皆様が色々な形でアカデミックキャリアの可能性を検討されている様子が、非常に嬉しく思いました。同じイギリスで皆様が、日本人としてどのように研究生生活を頑張っているのかを垣間見ることができ、とても励まされました。この度は参加して下さった皆様に心から感謝申し上げます。

## ◆小館 尚文 先生◆

超領域でチームを組みながら、研究してきた社会学者として、パネルの先生方から伺ったお話は大変興味深かった。また、年齢層も分野も多様な参加者の方々との意見交換も盛ん

で、セミナーにはとても活気があった。若い人たちが将来のキャリアや研究・教育の現場について真剣に考えて、模索する様子がわかり、刺激を得ることができた。アイルランド政府は、今後、全国にある高専を合併しながら、大学化していく方針を掲げており、日本とは逆に、高等教育部門は、(理工系を中心に)成長・拡大路線である。Post-Brexit 時代には、唯一の英語圏加盟国となるアイルランドの研究環境も大きく変わっていくことが予想され、チャンスがあれば皆さんにも目を向けて頂ければと思う。今回は、貴重な機会を頂き感謝している。

## ◆上野 信雄 センター長◆

研究を目指す若手にはそれぞれ異なる心配事がある。サバイバルセミナーは、若手研究者に自分の将来のために経験者に直接聞くことができる機会を提供するために2017年に開始したもので、今回で第3回目になる。専門分野によって学術上の文化や価値観が異なるため、抱える問題の相互理解の時間が足りないという大問題があるが、最も大切なことは、このような機会に思い切って質問し、それをきっかけとして後でコンタクトできる人を自分でつかむことであろう。

本セミナーを振り返ってみると、パネリストとの質疑セッションやレセプションで『個人的に知りたいことを深く聞いておく』、新しい『知り合いを作る』、そして更に3次会にも参加して、『後でコンタクトするバリアーを下げる』、等の機会を提供できたと思う。何より、質疑セッションでの“間”の無い質問の数々と先輩の経験に基づく研究費の獲得やポジション探し・応募へのノウハウと具体的コメント、加えて男女で違う問題点も共有できたことは有用であった。レセプションでの皆々の会話の平均音量の大きさが、皆さんをサポートする JSPS London 職員への励ましになった。

尚、3名のパネリストの先生方に加え、今回は在英日本国大使館の小川 浩司一等書記官とJST・CRDS海外動向ユニットの山村 将博氏に日英政府による科学技術政策の概要について分かりやすく講演いただいた。お礼申し上げます。



パネリストの言葉に耳を傾ける参加者



# センター長の英国日記

## ⑫「まっとうな“暴言”2:報道のあり方、男女参画の不平等、少子化、叱れなくなった日本」

ロンドン研究連絡センター長  
上野 信雄



### ■プロローグ

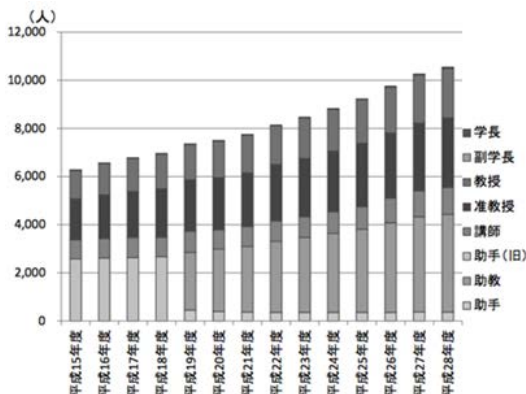
東京大学の今年の入学式での同大学男女共同参画担当理事・副学長上野千鶴子さんの祝辞がジェンダー問題・女性教員数問題を取り上げ、大きな反響を呼んだ[1,2]。社会の様々な分野における男女の『公平』な参画問題は重要な課題であるが、最近では真摯な議論ができなくなりつつあるように思う。女性教員数の改善への努力については、現状を知らない、上野千鶴子副学長の祝辞を聞いても(読んで)感覚的にしか判断ができない。そのため、ちなみに国立大学の女性教員数の年次変化の状況を図1に示す。国立大学の教員数が減少している状況であるが、女性教員数は平成27年度に10,000人を超え順調に増加していることが分かる。私立大学の状況も同様な結果である[3]。参考のため国立大学の女性教員の比率と女性職員の比率を図2に示した。もちろんまだ女性教員の数は男性教員数に比べて大変少ないが、改善されつつあることは理解できる。図2をもう少しよく見てみると、若手に位置づけられる「その他一般職員」と「主任」の比率から、女性職員の最近の採用数は男性職員を超えている。

しかしその一方で、博士号取得者の安定就職が改善されず益々求職競争が激しくなり貴重な人材から自殺者が出ている

状況に思いを馳せると、女性だけで無く博士号取得者全体の活用策をもっと真剣に考える必要がある。

尚、国立大学の全教員数(本務者数)も近年は年々増加しているので図1と図2の女性の増加の意味についても若干注意を要する。例えば、図3から分かるように近年の医療系職員の増加を考えると、全教員の増加は、医療分野の部局の強化によるものと考えられる[4]。ちなみにデータは省略するが、40才以下の教員(任期付き+任期無し)の数は年々減少しており、特に任期無し40才以下教員数は激減しているが[4]、センター長のこれまでの経験と一致する。また、医療系職員の数は大きく増加しており、事務系職員の数は微増している。このことは、医療系部局以外の事務職員が大きく減少していることを示している。さらに、これらは分野によって大きな差があることを示しており、事務系や医療系職員として博士号取得者を活用することができないものかとも思っている。教育研究機関だけで無く、行政分野の機関等でも博士号取得者の採用を、今以上に考えるべきだろう。欧米ではそのような採用が大変多い。

**男性社会が女性を拒んだり、博士号を持たない人達の多い職場が博士号取得者を拒んだりすることのないようにしたいものだ。**



単位:人

| 年度     | 合計     | 学長 | 副学長 | 教授    | 准教授   | 講師    | 助手(旧) | 助教    | 助手  |
|--------|--------|----|-----|-------|-------|-------|-------|-------|-----|
| 平成15年度 | 6,270  | 2  | 3   | 1,187 | 1,703 | 793   | 2,582 | -     | -   |
| 平成16年度 | 6,560  | 2  | 3   | 1,313 | 1,813 | 809   | 2,620 | -     | -   |
| 平成17年度 | 6,774  | 2  | 5   | 1,383 | 1,919 | 835   | 2,630 | -     | -   |
| 平成18年度 | 6,950  | 2  | 5   | 1,439 | 2,026 | 815   | 2,663 | -     | -   |
| 平成19年度 | 7,352  | 2  | 5   | 1,478 | 2,139 | 881   | -     | 2,395 | 452 |
| 平成20年度 | 7,491  | 1  | 6   | 1,523 | 2,172 | 806   | -     | 2,592 | 391 |
| 平成21年度 | 7,734  | 1  | 11  | 1,567 | 2,238 | 813   | -     | 2,737 | 367 |
| 平成22年度 | 8,127  | 3  | 10  | 1,604 | 2,357 | 845   | -     | 2,949 | 359 |
| 平成23年度 | 8,452  | 3  | 8   | 1,684 | 2,423 | 862   | -     | 3,116 | 356 |
| 平成24年度 | 8,813  | 3  | 11  | 1,737 | 2,526 | 894   | -     | 3,281 | 359 |
| 平成25年度 | 9,225  | 3  | 15  | 1,822 | 2,639 | 936   | -     | 3,450 | 360 |
| 平成26年度 | 9,743  | 3  | 23  | 1,900 | 2,712 | 1,026 | -     | 3,718 | 361 |
| 平成27年度 | 10,258 | 3  | 32  | 1,990 | 2,826 | 1,073 | -     | 3,962 | 372 |
| 平成28年度 | 10,538 | 2  | 44  | 2,050 | 2,894 | 1,119 | -     | 4,063 | 366 |

図1: 国立大学の女性教員数の変化(職階別): グラフ(左)と各年度の数(右の表)。グラフ(左)の色分けが白黒で見にくいので右の表を参照。国立大学の女性教員数は、平成15年度以降どの職階も増加傾向にあり、「助教」の女性教員数は特に伸びが大きく、平成19年度に比べ平成28年度は約1.7倍となっている[3]。

## センター長の英国日記

## ・女性教員比率（職階別）

## ・女性職員比率

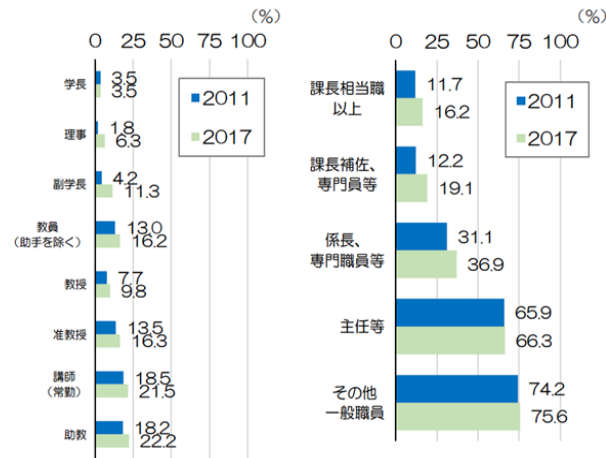
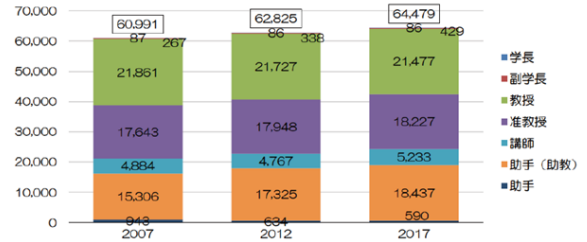


図2: 国立大学の女性教員・職員の比率[3]

## 教員数（本務者）



## 職員数（本務者）

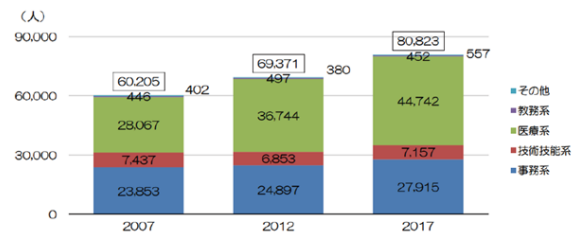


図3: 国立大学の全教員数(上)と全職員数(下)の年次変化[4]。教員数の「緑色」は教授、職員数の「緑色」は医療系職員。

## ■叱ることができなくなった日本

職業や仕事に関する公平性や役職者のジェンダー問題さらに少子化に関わる諸問題は、スポーツや武道などで、男女別競技にした理由やこれらの競技のあるものは体重別にした理由とその必要性にまで、思いを馳せて考えないと丁寧な議論にはならない。実に様々な側面があるからだ。親しい友人あるいは十分信頼できる友人、気心の知れた同僚等との議論では『使用する言葉』にあまり気づかずに意見交換ができるが、少しそうでない人達が同席していると、『うっかりした』言葉が使えず口を閉じるか、どのように切り取られてもさしあたりの無い語句によるハッキリしない意見しか口にできない。簡単に言うと本質に迫って(分かりやすく)話ができなくなったように思う。特に少子化の改善は子供の増加が律則になるが、男子と女子との本質的な違いも含んだオープンディスカッションを安易にできない状況になってしまった。少しその原因も考えながらペンを進めたい。

女性が社会での地位を失っていったルーツは仏教やキリスト教の教えとその理由にまで遡る必要があるようだ[5]。歴史の研究では、つまるところ宗教がその信者を増やすために本来の教義を放棄し、信者の確保という目の前の目的のために力のある者の方針に合わせて『女性は不浄』とする考え方を利用したためと考えられている[5]。

近年、センター長がことさら“気”になっていることの一つで、ここで問題として挙げておきたいのは、上野千鶴子副学長の

祝辞でも使用された『性差別』という用語である。『性差別』というキーワードは『男女間の不平等』という言葉に比べると、常に暴力と一体化した事件の記憶を呼び起こすため、ひどく乱暴でとても居心地の悪いニュアンスを持っている。そのように『性の異なる男女』の協力が不可欠な子供の出生について少子化に絡んで議論すると、大概の場合“差別”やハラスメントという範疇で記事となり報道される。このような記事は読者の興味を引き、読者数の獲得のために益々いいかげんな関連記事が増え、うっかりしたことを言うインターネット上で袋だたきに遭うことになる。つまり、その乱暴な意味合いを含んでしまう語句が出産問題と結びつく話題では、おいそれと議論もできないのだ。

日本では、社会の至るところで「完全を目指す」ため大変だ。検察に起訴されると99.1～99.9%が有罪になるということはこの好例である。このため、起訴したら有罪になるように、取り調べ段階で異常な努力が払われ、中には証拠を改ざんしてしまうような場合も出て来る。バイオ・医学分野で論文不正が多いのも、行き過ぎた競争のため、その集団内で自己肯定の理屈を共有し、自分自身の制御が効かなくなるということであり、同様だ。言いかえると、刑事事件の場合、証拠のでっち上げ、証言の捏造によって100%の有罪をめざす、論文不正の場合には“よりきれいな実験結果”あるいは“より望ましい結果”になるように結果に“細工”を加えても叱られないため、これらに慣れてしまい、自己規制が働かなくなる。

## センター長の英国日記

集団としては、皆がやっているため完全にモラル欠如となって自ら浄化できなくなってしまうのが常である。つまり、社会の中の至る所で同じ症状を呈する。中国の社会・仕事場（日本で言う政府といわゆる役人、そしてその影響下の人々）が現在抱える、コネ、賄賂、隠蔽などの問題と同じである。規模は小さいがセンター長の若い頃の貧しかった日本も同様であったと記憶しているが、最近の日本でも再びその“怪”が頭を上げた、と考えざるをえない。

## ■メディアの役割を問う

繰り返すが、うっかりして不適切な用語を使うと、文脈の流れからはどうと言うことのない内容でも、その単語の付近だけを切り取って報道され、大悪人にされるなど大変なことになる。最近あった明石市長・泉房穂氏の暴言問題[6]は、そのような問題の好例だ。少なくとも、市長が職員を叱りつけたときの言葉が紳士的でなかったせいもあるが、言いたいことが、記事では正確に伝えられていなかった例の一つであり、記者（メディア側）の放漫による暴走のようだ。叱りつけた現場を盗聴記録した者がいたという情報もあるので、それが真実であればその方が問題が大きいと思う。一旦暴走し出すと、これに乗り遅れないように便乗する記者が多いことに驚いてしまう。

関連した他の例を挙げよう。図4は令和元年5月31日の東京新聞「こちら特報部」欄の石井紀代美記者による女性問題に関する記事の上部のコピーである。「お子さんやお孫さんにぜひ、子供を最低3人ぐらい産むようにお願いしてもらいたい」という桜田義孝前五輪相の言葉は、「女性は子供をたくさん産むべきだ」という意識の結果であり「繰り返す女性軽視発言」だ、という論調である。センター長には、これも一方的すぎる記者の論理のように思える。つまり、反対のために言葉尻を捉えて攻撃する無責任な野党の論法と同じ類いのものと感じた。できるだけ公平な視点から真摯な議論ができないものだ

ろうか。ほどほどに良い教育を受けると、「風が吹けば桶屋が儲かる」式のこじつけ論理展開の技術だけを覚えるので困ったものである。もっと全体を捕らえた多角的な見方を並行する習慣を身につけたい。

上記のような正確さに欠ける報道/記事が増加するのは、テレビなら、視聴率を上げるために「視聴者が好む内容の番組を増やす」とことと同じだ。テレビの視聴率調査と同じく、読者の見るデジタルニュースをカウントするデータ収集が常態化している。どのニュースがヒットしているかを調べ、ヒットしている話題のニュースを積極的に取材し、優先的に配信するようになっている。使い方を誤ると大きな社会問題を生み出すに違いない。すでにその兆候が現れているように思うし、新聞がデジタル化しているため、その傾向が、（センター長が）最も信頼できると思っていた新聞紙面の記事にも現れているのである。今やニュースにはこれまで以上のスピードが要求されるので、「取材」が不十分で正しくない記事でもそのまま世に出してしまっている。モラルや社会責任感のあるジャーナリズムの崩壊がかなり前から始まっていると感じている。



図4: 令和元年5月31日の東京新聞「こちら特報部」欄の石井紀代美記者による特集記事の見出し部のコピー。「お子さんやお孫さんにぜひ、子供を最低3人ぐらい産むようにお願いしてもらいたい」という桜田義孝前五輪相の言ったことが、『『女性は子供をたくさん産むべきだ』という意識の結果である』、という論調で書かれており、見出しは「繰り返す女性軽視発言」となっている。本当はなんと言ったのだろうと知りたくって本文(上のコピーには現れていない)まで読んだ。たいしたことは書かれていなかった。

センター長の  
ひと言

センター長は、日本人が自己制御(自律)できなくなったことについて、しばしば以下のように呟いている...

『叱ることができなくなった日本』で述べた一連のことは、幼少時代から大人に至るまで、家族から、近所の人達から、先生から、友達から、先輩からそして社会の人々から注意されたり叱られたりすることが少なくなって、反省・努力する機会が少なくなり、自律できる人に成長することが困難になったからだ。即ち、ほめるだけで叱らなくなったのだ。職場の新人にコメントしたり注意したりすることがやりづらくなり、その結果、若者の多くが、ほめられるだけの「ほめ殺し」に会ってしまう世の中だ。注意されたことを自分の成長の糧にできる者は、まわりがきっと(良い意味で)ほってはおかないだろう。



## センター長の英国日記

## ■英国と日本

男女の公平な機会均等について、より真摯な議論を行いつつ少子化問題の取り組みに風穴を開けないと、人口問題の最も基本となる部分は解決しない。子供が増えないことにはどうしようも無いのだ。英国では人口が年々増えている[7]。もちろん移民が英国の人口上昇を支えているが、それだけでは無く「英国籍を持つ国民」の子供も順調に増えている。グローバル化の大先輩の英国の抱える問題から分かるように、移民の受入は新たに深刻な問題を生じさせる。このため、移民の受入だけでは国家の少子化問題の解決にはつながらない。この問題は、日本の民族と日本国の関係、それらの存在意義についての国民による学習を要求している。少子化の改善・解決には、小学校教育を含む教育機会を使うことが有効なはずだし、社会に対する真摯な問題提起はメディアの役割、言い換えるとジャーナリストやモラルのある者の社会責任のように思う。人口減少については、努力する女性・母親、そして広く子育てへの支援を皆で行おう、というのをメディアが具体策を挙げ、キャンペーンを張ってはどうか。図4の記事のように、些細なことや失言を事細かく執拗に取り上げて国会議員を批難するよりジャーナリストの大切な仕事なのではないか。日本では、ベビーカーをバスや電車に気軽に乗せられないことや、電車などで妊婦や老人などが優先席を譲ってもらえない現状に対して、改善することを促すなどについても協力してほしいものだ。

英国では妊婦の皆さんをはじめ弱者は日本より大変幸せだ。ちなみに、センター長が足にけがをして杖をついていた時、ロンドンの地下鉄通勤では大概の場合、席を譲っていただいたが、日本ではそのようなありがたい経験はまだ無い。また、ロンドンでは、混雑した地下鉄やバスの中でもベビーカーや車椅子を見るが、日本でこれらを混み合った電車やバスの中で見たことはない。そもそも日本ではバスにベビーカーを乗せる十分な空間が無いのだ。また、日本では、なんとなく冷たい視線を感じるので、乗客の多いときには大概の人々はベビーカーに子供を乗せて電車・バスに乗ろうとしないだろう。特に大都市圏ではその傾向が定着している。

## ■まとめ

今回の狙いは、報道された記事は最近になって益々その正確さが怪しくなっている、ということを書いておきたいことが第一である。その奥底に『ほめるだけで叱れなくなった日本』がありそうだ。暴言が多いと言われる男女共同参画問題、少子化問

題を題材とし、アカデミック分野のポストドク問題にもふれた。

図1、2に示す国立大学の女性教員数の最近の増加は、まだまだ十分とは言えないが、その数は顕著に増加し続けている。女性支援策は、ポストドクの有効活用策に比べると、強力に政府と大学によって続けられていると言って良い。

センター長としては、国策として増やした博士号取得者が安定した職につける道を提供する努力もお願いしたい。というより、莫大な税金の投入によって育てたこれらの人材を活用できない損失の大きさを自覚してほしいと言いたい。また、政府が、「耳に痛い」意見に一層耳を傾けること、を願っている。

この原稿を書いた後、朝日新聞の『折々のことば』欄に「叱ることができなくなった日本」の内容と類似の記事を見つけた。図5に示しておく。



図5: 朝日新聞(International Edition: 2019年6月22日)「折々のことば」を転載。

## 【参考資料】

- [1] 祝辞全文、  
[https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b\\_message31\\_03.html](https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message31_03.html)
- [2] 祝辞の反響の例、  
<https://headlines.yahoo.co.jp/article?a=20190424-00560560-shincho-soci>
- [3] 大学等の女性教員数 - 内閣府 [平成28年度独立行政法人等の科学技術関係活動等に関する調査(平成27事業年度)より]、  
<https://www8.cao.go.jp/cstp/stsonota/katudocycosa/h27/innovation8.pdf>
- [4] <https://www.janu.jp/univ/gaiyou/files/20180130-pkioshshiryu-japanese.pdf>  
(出典) 国立大学協会、「国立大学法人基礎資料集」の<3.教職員>、2018年1月30日。(元データ) 文部科学省「学校基本調査」(2017)。
- [5] 若桑みどり著、「クアトロ・ラガッツィ: 天正少年使節と世界帝国」(集英社文庫) 上巻(pp. 261-274)に、仏教等の宗教で女性が軽視されたことが紹介されている。<センター長コメント>繰り返し読む価値のある本である。しかしドラマ化され2019年1月に配信されたために在庫が僅かになり入手困難と聞いた。
- [6] <https://www.asahi.com/articles/ASM1Y4364M1YPIHB019.html>  
本件に関する全体的な真実は自分で他の情報も収集して得て下さい。それによって何があったか分かります。
- [7] 英国の人口増加資料:  
<https://japanesewriterinuk.com/article/population.html>

# 在英研究者の 者窓から

## 第19回 Imperial College London 小野 昌弘



ラボメンバーとの写真(2017年12月)

### 日本から英国へ～独立の重要性

英国に移ってからの10年間、異国ゆえ大変なこともあったが、英国に来たおかげで若いうちに完全独立して自由に研究できたことは、研究者として決定的なことだったと思う。現在私は世界の一流の研究者たちから独立した“rising star”研究者として認識してもらっている。もし自分が英国に来ることなく日本で大教室の助教や准教授の職に甘んじたままだったら、このように世界に通用する研究者として認められることはなく、人生の貴重な時間を下働きに費やしていたと思う。

誰から聞いたのか覚えていないが、基礎研究者は40代に人生で最も重要な研究ができるという。それは実際確かなことだと思う。まず、最近の科学研究では知識・技術を取得するのに時間がかかり、30代前半までの時間は修行に費やされてしまう。一方で歳を取りすぎると新しいことを学ぶのが難しくなる。40代にしたい研究を自分の考えで進められる自由がこのうえなく重要である。

私は京都大学で博士課程をした同じ研究室で数年助教として研究した。それは大学の「助手」が「助教」に名称変更になった直後のことである。当時の名称変更について大学は「助教に名称変更することで独立した研究ができるようにする」と告示した。私はそれを真に受けて独創性のある研究を生み出すべく努力した。そして免疫学の根本的な問題に取り組み、新しい免疫学を追求しようと思っていた。

### Dr Masahiro Ono

Senior Lecturer, Department of Life Sciences,  
Imperial College London  
Honorary position: Visiting Associate Professor,  
International Research Center for Medical Sciences,  
Kumamoto University (2017-)

### 専門: 免疫学

1999 京都大学医学部卒業, 皮膚科研修  
2006 京都大学大学院医学研究科 博士(医学)  
2009 Human Frontier Science Program Long-Term  
Fellow, University College London  
2013 BBSRC David Phillips Fellow (Principal  
Investigator), University College London  
2015- 現職

しかしながら、全て名ばかりだった。いくら自分で研究費を取っても、研究室では何事においても教授の意向が絶対だった。研究の自由、特に精神的な自由が皆無だった。そこでHuman Frontier Science Program (HFSP) からの3年の長期フェローシップを獲得し、英国のUniversity College London (UCL) に研究の場を移した。34歳のときだった。

### 自己研鑽のための3年間

留学は自分の研究のための技術・方法論を広げることが目的だった。当時、新しい方法論として システム生物学が台頭しており、この領域で 留学先を探した。日本の研究室での経験から、大きな研究室で駒として使われることは避けたかったので、北米の研究室および研究活動の活発な大研究室を敢えて避け(1)、数学者と共同研究していた免疫学者の故ロビン・カラード教授(UCL)を選んだ。

UCLでは、数理・データ解析を独学しながら免疫学的データ解析法の開発を独り行なった。研究所すぐ近くにある大英図書館に通い、古い文献から社会学や環境学のための統計方法を掘り起こし、現代の免疫学データ解析に応用した新しい方法を確立した。こうして自分の考えだけで自身の力を蓄え技術を磨けた3年間は貴重な時間で、このおかげで自分の研究の新しい方向性を見出し、データ解析の新しい武器を手に入れ、共同研究者を増やし英国の社会に根をおろすことができた。



## 在英研究者の者窓から

だから、当時、同じユニット内の同僚である教授に強く勧められて、独立用のフェローシップに応募したのも必然の成り行きだった。このような制度は当時の日本には存在しなかったもので、勧められるがまま書類を準備したのだが、これが次の人生の岐路になった。

### 独立からテニユア獲得

フェローシップの申請書は一次審査を通り面接を受けることになった。しかし英国での面接において何が評価されるのか全く想像もできず苦労した。幸いUCLには研究グラント申請のサポートをする部署があり、その担当者が細やかに教えてくれたので、面接もそれなりの出来で乗り切れた。こうして2013年に5年間のフェローシップ(2)を受賞し、UCLで主任研究者として研究室を立ち上げた(3)。

ところがその直後から、友人の英国人教授たちは、テニユア(永久職)を獲得するため行動を開始するよう強く勧めるのである。UCLの研究所長に会って交渉事をはじめたものの、UCLは新規雇用に関わり腰で交渉は難航した。しかしまたま現職の大学、インペリアルで免疫学のLecturerの公募があり、応募したところ、Senior Lecturer (Associate Professor相当)として採用された。

英国の大学は日本と違い、教授という称号は給与体系の職階にすぎず、Lecturer以上の永久職のスタッフ同士は対等になる。つまりLecturerだからといって上に教授がいるわけではない。このように全ての研究スタッフの独立性が守られており、精神的な自由を担保する。これが独創性の高い研究を進めるための基盤だと思う。

以上までの過程だけでも大変だったが、それ以上に胃が痛かったのは研究グラントの継続だった。1年間に最低でも1500万円以上の研究費がなければ国際的に競争力のある免疫学の研究を続けることは難しいが、このレベルの研究費を獲得するのは困難である。このためには、フェローシップ中の研究成果を質の高い論文に仕上げる、新しく魅力的な研究プロジェクトを提案することの2つが重要だが、独立用フェローシップを取った研究者のうち半分程度しかこの規模での研究費を獲得できていない。

### 近況～研究者・教育者として、また日英をつなぐ橋として

研究室で受け入れた最初のポストドクは論文出版後にバーミンガム大学で永久職を獲得し自分の研究室を立ちあげた。これは私にとっても英国社会における最初の大きな業績であり喜ばしい。現在私は最近獲得した研究グラントで新しいポストドクを雇い、二人の博士学生を抱える小さな研究グループを運営しつつ、講義など教育にも携わっている。

また最近、熊本大学の客員准教授として日本の科研費を獲得でき、今年度から熊本でも研究を始めた。これを発展させて、日本と英国のそれぞれの強みを活かした研究・教育体制を築いていきたいと考えている。

### アウトリーチ活動～社会をつなぐ橋として

英国社会では階級問題は深刻であり、教育の機会が少ない社会集団に科学を届けるアウトリーチ活動の重要性は社会で広く認識されている。この一環で、昨年秋以来、私はインペリアルのアウトリーチ部門に依頼されて、ダンスカンパニーImpeloによる細胞生物学・免疫学を題材にしたダンス作品CELLの科学監修をしている。さすがプロの仕事でダンスの出来はすばらしく、今は関連したコミックとウェブサイトを準備中である。7月にインペリアルにて初演で、小学校を招待して子供達にラボ体験もしてもらう。

### 最後に～英文学のススメ:英国社会を生き抜くための力

日本人が英国社会を生き抜くのは容易なことではない。日本社会にネズミ男(に相当する性格の人間)が実在するのと同じ意味で、英国にはハートの女王やトランプの騎士が実在することにこの10年で気がついた。昔話や文学というのは、その文化における人間の表現型から社会動態について何かのメッセージを伝えるものなのだろう。文学のおかげで一見不可解な状況も理解できたし、苦境も喜劇として楽しめた。学部生のとき以来、故・米本義孝教授のおかげで随分と英文学を読み親しんでいたのだが、これは語学以上に英国社会を生き抜く上で重要な経験だったと実感している。

### 註釈

1. 一般的には、留学先には研究が活発に行われている名の通った米国の大きな研究室を選ぶのが成功のための定番とされる。
2. 英国の非医学系生物学の政府系助成機関である「バイオテクノロジー・生物科学研究会議(BBSRC)」からのBBSRC David Phillips Fellowship
3. 研究上の経緯については次の筆者による記事を参照されたい。小野昌弘、「制御性T細胞とは何か - 時間から免疫細胞を理解する先端研究紹介」、ヤフーニュース個人 2018年7月13日、<https://news.yahoo.co.jp/byline/onomasahiro/20180713-00089278/>

## 英国大学の今

### ブレクジットは英国の大学に何をもたらすか(3/3)

ブレクジットを目前に控え、英国の大学がどのようにこれを受けとめ、対応しようとしているのか、シリーズ最終回となる今回は、英国全大学を代表する立場にある英国大学協会の担当者へのインタビューをお届けする。

#### Universities UK (英国大学協会)

面会日：2019年1月17日

対応者：Dr. Nicholas Mithen

Policy Officer - Asia,

Universities UK International

概要：

英国大学協会は、英国136大学が加盟する英国大学の代表機関であり、教育、研究、奨学金を通じて国内外の学生・一般市民への英国大学のインパクトを最大化することを目的として活動している。日本における国立大学協会の対応機関である。



#### Q ブレクジットの影響について、どう考えているか？

A 何が起こるのか不確実なことが非常に多く、すべての大学がブレクジットを憂慮している。EUからの研究費の減少やスタッフ・研究者のリクルートへの影響が懸念される。加えて私は、ブレクジットの大きな課題は(英国や大学の)評判(に与える影響)だと考えている。英国の大学は、「英国はオープンだ」と見られたいと願っているにもかかわらず、ブレクジットによって「英国は閉ざしている」と見られてしまうことは残念だ。

#### Q ブレクジットにどう対応すべきと考えているか？

A 現在、ヨーロッパは貿易、研究費、学生の移動などほとんどの分野において英国の最大のパートナーで、ヨーロッパとの関係強化は今後も必要だ。その一方で、英国は国際的でなくなっているという見方を覆すために英国がもっとグローバルになるチャンスでもある。その意味で、ブレクジットはヨーロッパから世界への出発を促すモーニングコールともいえる。ただし、英国大学はヨーロッパ以外の国との関係を築く経験が浅いため、英国大学協会が積極的に支援していく必要があると考えている。

(インタビューは以上)

#### おわりに

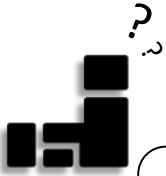
以上、本シリーズでは、まずブレクジットの英国大学への影響について概観(第1回)した上で、大学及び英国大学協会がこれをどう捉え、対応していこうとしているかについて、担当者インタビューを通じて紹介した(第2回、第3回)。

研究者や学生にとってブレクジットはマイナス面はあってもプラス面はないが、にもかかわらず未確定要素が多いために大学は有効な手立てが講じられないことに戸惑っている様子が見えがえた。留学生リクルートに関しても、前回紹介した2大学(UCL、LSE)は、ブレクジットの影響をそれほど懸念していない印象を受けたが、これら世界的知名度を誇るいわゆるトップ大学をもって、英国大学全体を論じることはできない。実際、本稿執筆のためのインタビュー依頼に対して、一部の大学の留学生リクルート担当者から「ブレクジットについては回答できない」と拒絶されることがあったが、これも大学によっては留学生の減少につながると深刻に受け止めていることを示すものであったとも考えられる。

他方、ヨーロッパの外に視野を広げ、今まで以上に世界と多様な関係を構築していくきっかけにするチャンスと捉えて動き出していることも事実である。英国の大学との関係を深めたいと望む日本の大学にとっても追い風となるに違いない。(国際協力員 里村 遼)

## ぽりーさんの英国玉手箱

～ 日本人の素朴な疑問に英国人ぽりーさんが答えます ～



### Q 英国の四季のイベントについて教えてください



**Polly Watson**

ロンドンセンターのローカルスタッフ。最近お母さんになりました！冬とクリスマスホリデイが大好きです。

**A** 英国気象庁 (Met Office) では四季を3ヵ月ごとに区分けしているののでそれに基づいて説明しますね。

#### ■ 春 (3月、4月、5月)

春はそれまで屋内で引きこもっていた反動なのか、みんな急に活動的になり、スポーツイベントが目白押しです。まずはオックスフォード大学対ケンブリッジ大学のボートレース、馬の障害レースである Grand National、ロンドンマラソン、サッカーのFAカップのファイナルも行なわれますね。

ご存じの通り英国は4つの国で構成されていますが、それぞれの国に守護聖人が居るんですよ。スコットランドを除く3つの国の守護聖人達は春の訪れをお祝います。

ウェールズの守護聖人は St. David で、3月1日にはウェールズの国花であるラッパ水仙とリーキ (巨大なねぎ) を身に着け、カウ (Cawl) というスープとウェルシュ・レアビット (Welsh rarebit) というチーズトーストといった伝統料理を食べて祝います。都会では、女性はウェールズの民族衣装を着て、パレードに参加します。

3月17日はアイルランドの守護聖人である St. Patrick が登場です。アイルランドのシンボルでもあるクローバーを身に着け、緑色の装いをし、ダンスやゲーリックフォークソングなどで盛り上がる Ceilidhs (ケリーと発音) というイベントがそこかしこで開催されます。この間はレント (Lent) というキリスト復活を祝う40日の期間にあたり、主にカトリック信者には食事制限の時期でもあるのですが、この日だけは好きなものを好きなだけ食べても飲んでも許されるんです。

4月23日はイングランドの守護聖人 St. George の日。人々は国花であるバラを身に着け、イングランド国旗や旗布を建物などに飾り付けます。主なイベントとしてはモリスダンスや、“パン

チとジュディ”という人形劇がまず思い浮かびますね。

あと、春といえばイースター (復活祭) を忘れてはいけません。クリスマスと同じぐらい大事です。Good Friday (復活祭前の金曜日) から Easter Monday (復活祭の翌日の月曜日) まで4日間の休暇があります。クリスマスのように家族が集い、隠されたイースターエッグ (色とりどりに塗られた卵) を子供達が探すという遊びをして過ごします。クリスマスのように毎年決まった日付ではないのですが、イースターが来ると春を感じますね。

#### ■ 夏 (6月、7月、8月)

GCSE (一般中等教育修了試験) や Aレベル (公立大学入学のための統一試験) などの試験の結果が発表され、大学進学を志す人には心騒がしい季節でもあるのですが、学校は夏休みに入り、休暇を考える時期ですね。とにかく活動的になり、音楽系から娯楽系まで、様々な屋外イベントが多くなります。大規模屋外ロックフェスティバルのグラストンベリー、エジンバラでは伝統衣装のスコットランド軍楽隊と兵士がパレードするミリタリータトゥー (Tattoo とは刺青のことではなく帰営ラッパのこと) と世界最大の芸術祭といわれるフリンジフェスティバル、ロンドンではリオのカーニバルのようなノッティングヒルカーニバル、ロイヤルアルバートホールで2ヶ月間開催されるクラシックコンサートのプロムス (野外版もあり、ロンドンだけでなく各地で開催されます) などもあり、各地域で野外ミュージックフェスティバル、野外舞台などが催されます。

もちろんスポーツ観戦のときでもあります。モータースポーツレース英国グランプリ、世界テニスの4大国際大会のひとつであるウィンブルドン選手権、自転車プロロードレースのツール・ド・フランスはこれまでイギリス国内に走行区間が設定された大会もあり、それ以来人気が高まっています。



## ぼりーさんの英国玉手箱

### ■ 秋（9月、10月、11月）

9月からは収穫の秋です。至る所で収穫を祝うイベントが開かれます。地元の教会などでチャリティーイベントを開催し、収穫物や自分の趣味で作ったクラフト作品などを売って、コミュニティで恵まれない人などに寄付をしたりします。

なんといっても食欲の秋なので、フードフェスティバルも各地で開催されます。大きなイベントとしては、英国各地を巡業するチーズフェストというチーズのお祭りがあります（丘の上から急な斜面にチーズを転がして追いかけて行くイベントがグロスターシャーであります。これは5月に開催されます）。

あと、ハロウィンも秋の風物詩になりましたね。11月5日のガイ・フォークス・ナイトという、各地で花火を上げるイベントも有名です。これは1605年に、国会議事堂であるウェストミンスター爆破未遂事件で逮捕されたフォークスにちなんだものです。花火だけでなくかがり火（Bonfire）で巨大な“ガイ”（その年に最も世間の不評を買ったとして選ばれた有名人。2018年は Boris Johnson 一選理由は「常にニュースを騒がせ、絶え間なく失言を繰り返した」ため）人形を燃やすイベントもあります。

ここでやっとスコットランドの守護聖人の登場です。11月30日は St. Andrew の日です。スコットランド以外では守護聖人を祝う日は祭日ではないのですが、スコットランドでは祭日となります。もちろんスコットランドの旗である青をバックにした白の斜め十字を掲げ、国花であるアザミを飾りキルトを着て、スコットランドの文化や食べ物（ハギス、ブラックプディング等）、音楽で溢れた1日を送りお祝いします。

### ■ 冬（12月、1月、2月）

冬といえばクリスマスと新年ですね。クリスマスに関しては以前かなり詳しくお話していますが、ホグマニー（hogmanay）はご存じですか？これはスコットランドの大晦日で、一大ストリートパーティーとでもいうのでしょうか、12月31日から1日未明まで呑めや歌えやでお祝いするものです。

ロンドンではテムズ川沿いで行なわれる花火の打ち上げが有名で、テレビでも必ず中継が入ります。冬の初めごろはクリスマスと新年の準備に向かっているのかあまり大きなイベントではなく、みんな家にこもりがちで、どちらかというテレビ番組が充実しています。“I’m a Celebrity...Get Me Out of Here!”（セレブ達がジャングルで何週間にも渡って集団サバイバル生活を送るリ

アリティ番組）とか、“Strictly Come Dancing”（有名人達がプロのダンサーと組む社交ダンスコンテスト）などが有名なところ。年が明けてからも英国映画テレビ芸術アカデミー（BAFTA: British Academy of Film and Television）が映画、テレビ番組をはじめビデオゲームなど優れた作品に賞を授与するイベントもありますね。

2月14日はバレンタインデーです。この日はカップルがお互いの愛の表現としてカード、花束、チョコレートなどをプレゼントしたり、夜ロマンチックなお食事をするというのが定番ですね。

キリスト系の行事では懺悔（ざんげ）の火曜日（Shrove Tuesday）があり、この日にパンケーキを食べるので通称パンケーキデイとも言われています。懺悔の火曜日の翌日は灰の水曜日（Ash Wednesday）です。この日から前述の40日間のレントに突入します。レント期間はあるべく食事を節制し肉、卵、油、乳製品を避けるので、今あるそれらのものを使い果たすためにパンケーキを作ったのでしょね。それでその40日後に何があるかというといースターなんです。なので、懺悔の火曜日の日には年によって、2月だったり3月だったりするんですよ。

英国の祭日に当たる日を“バンクホリデイ（Bank Holiday）”というのですが、なぜバンク（銀行）なのかよく尋ねられます。基本的には銀行も閉まってしまい、ビジネスが出来ないのでみんなお休みする日ということから来ています。英国のそれぞれの国によってホリデイが異なりますし、特別その年だけバンクホリデイを設ける場合もあります。例えば英国王室の結婚式です。昨年も Harry 王子の結婚式があったのですが、バンクホリデイにはならなかったですね。長男の William 王子のときはなったのですが。

ざっと思いついただけ英国での四季を感じさせるイベントや行事を紹介しました。英国の象徴となるものばかりですが、これ以外にも地域でのイベントやパレードなどもあり、ここには書ききれないほど様々なイベントがあります。是非これらのイベントに参加して英国の文化に触れる機会を作って楽しんでください。

## 山田さんの徒然なるままに

～ JSPS London 現地職員が贈る、知られざる英国を様々な視点から語る痛快エッセイ ～



山田 泰子

2016年からロンドンセンターに勤務。毎週ズンバを踊ってます。

### 第7回 『鍵師になろうかな？』

事務所の金庫から見えない手提げ金庫が出て来た。小さい赤い金庫で、振るとカタカタと音がして何かが入っていることがわかる。しかし肝心の鍵がない。でもあのカタカタという音は気になる。いったい何が入っているのか、ロンドン事務所全員の関心事となった。

上からの指示で、ぜひ開錠してもらいたいとのこと。鍵穴のところに刻まれている番号をWebで検索したりと、色々方法を考えてみてもこれという打開策がない中、スペアキーを作るところに行けば何かしてもらえかもしれないという希望的観測のもと、早速副センター長と出かけた。“金の延べ棒が入っていたらどうしよう！”などと二人で期待をどんどん膨らませながらカウンタに到着し尋ねてみると、“出来ない”と言う。“Locksmith(鍵師)しかないね”と、その関係パンフレットをくれた。もちろん鍵師を呼べば有料で結構高い。あっけなく断られちよっぴりショック。せっかく出かけたのに得るものもなく多少落胆ぎみで事務所に戻った。すると、ある同僚は赤い金庫と共に出てきた大量の小さい鍵を一つ一つ鍵穴に入れて試し出すし、別の同僚は映画さながら、強盗たちがアジトで研究するかのよう金庫の開け方のYouTubeを見始めた。みんな金の延べ棒を狙っている！そんな様子に感化されてしまった私は、もしこの金庫を鍵なしで開けられれば、自分の隠れた才能が証明されることになるから、今後それを専門職として鍵師へキャリア変更を考えてもいいなあ、いや意外と犯罪に手を染めるようになり転落の道を辿ってしまうのであろうか？などとくだらない想像を巡らしていた。また同僚達とは、この行き詰った状況を少しでも楽観視しようと、“この鍵なし金庫を開けた瞬間の気持ち、味わいたいよね”等と話をしていた。

~~~~~

話は変わるが、最近読んだ英国高等教育関係の記事で驚いたことがあった。2017年から本格的に開始された教育・学生成果評価(TEF: Teaching Excellence and Student Outcomes Framework)。昨年からの制度に卒業後の長期教育成果(LEO: Longitudinal education outcomes)が加わった。これは卒業後の収入状況と高等教育がそれに及ぼす影響を見るものである。どの大学のどの学部を卒業していればこれだけの収入が得られているという資料で、大学進学希望者にとっては、進学先を決定するための1つの参考データになるという。このデータに基づいて英財政研究所(IFS: Institute for Fiscal Studies <https://www.ifs.org.uk/publications/13731>)が、29歳時点での高等教育の影響を収入として出している。また大学に進学しなかった人達のデータも使って、大学進学者との収入比較の様々な例を挙げている。例えば女性だったらOxford大で数学専攻、男性ならBristol大で経済学を専攻した場合、29歳時点で最も収入が増えるという。また男性の場合、クリエイティブアートや英文学、哲学を専攻した人は、同じような生い立ちで高等教育に行かなかった人より収入が低かったとか、医学や経済学を専攻していたら20%も収入増だったとか。〇〇大学とXX大学は卒業しても大学進学しなかった人より収入が低かったとか。よくまあこうも容赦なく実名を出しているなあ、まったくそれらの大学と関係のない私まで心が痛くなってきそうである。このような大学の関係者は、こんな記事破り捨てて見なかったことにしたいと思っているに違いない。

また、Onward (英国の独立系非営利シンクタンク)の調査による高等教育への資金配分に対する政府への提言報告書(<https://www.ukonward.com/aquestionofdegree/>)の記事では、アプレンティスシップ(見習い制度)を行なった人たちの結果も

## 山田さんの徒然なるままに

入れると、大学卒業5年後の時点で、5人に1人は大学でなく見習い制度などに進んだ方が高収入になるという結果が出ている。特に学生ローンの返済開始年収入が平均25,000ポンドなので、なるべく早くそれを超える収入を得るため、「卒業後収入」の高い大学に入学を誘導するべきだと助言している。多くの低収入卒業者を出している大学はたまったものではない。そういう大学は今後どうやって学生集めするのか、きっと緊急会議を開いたのではと心配してしまう。

高等教育に進学する理由は人により様々である。もちろん専門分野を学びそれを生かした職に就き高収入を得るというのが理想であろう。しかし大学で学ぶ過程で得られるものは専門分野の知識のみではないのではないのか？友人を作り協調性を身につける。留学生もしくは異なる出身の人と会い、違う文化に触れる。責任を負い、自分で決断する。自身の財政管理をする。批判的思考をする。時間管理能力をつける。問題処理能力をつける。いろんな失敗を重ねる過程で自信をつける、など大学生活を通して様々な社会性を身につけることも、専門分野を学ぶことと同じくらい重要な気がする。IFSの集計には出てこないこれらの能力も、雇用者が高等教育学位取得者に期待するものではないだろうか？

IFSやOnwardという名のあるところからの報告書ではあるが、目の前の結果だけを論じた、ただの机上の空論なのではと思ってしまう。今後AIが我々の生活に入ってくる時代を迎える

中、10年後なんていったいどういう社会になっているか想像もできない。まったく現在考えもつかないような職業が成り立ってくるだろうし、なくなっていく職業もあるだろう。今から10年後に29歳でBristol大の経済学専攻の学位を持っていたも、いったい誰がその高収入を保証してくれるというのだろうか？

~~~~~

ー その後赤い金庫がどうなったか気になる？

あまり金庫に振り回されても仕事の支障になるので、“じゃ、今日は10分だけという感じで毎日やればいいか”ということで、その日は針金クリップを2本使い、強盗さながらにガチャガチャやること5分、“あっ、開いた！”の声に同僚達が一斉に私のもとへ駆け寄って来た。“よくやった、すごい！”“山田さん、あの金庫開けられないと言ったスペアキーの店に行って、自慢してくれば？”“山田さん、今度のニュースレターのネタになりますね”(なりましたよ！)などなど、賞賛の言葉をもらい、皆で喜びを分かち合った。もちろん、金庫が開いたあの瞬間の感動も味わえた。

で、鍵師を目指すことにしたかって？どうしようかな？？たかが小さい金庫だったからね。。

で、何が入っていたかって？それは皆様のご想像にお任せする！





## | Recent Activities

## “JSPS-CRICK SYMPOSIUM ON GUT CIRCUITS”

11 JUNE 2019 The Francis Crick Institute, London

The Francis Crick Institute, HFSP research fellow, Symposium organiser,  
尾畑 佑樹 (YUUKI OBATA)

2019年6月11日 The Francis Crick Institute にて、消化管の恒常性維持に関するシンポジウムを開催した。消化管は生体内で最大の免疫器官であるとともに、その機能の大部分は「腸管神経系」と呼ばれる特殊な神経システムにより調節されている。また、消化管の管腔には100兆個もの腸内細菌が生息しており、腸の恒常性維持に重要な役割を果たしている。本シンポジウムでは、免疫細胞、神経細胞、腸内環境因子が織りなす細胞ネットワークを「腸管回路 (Gut Circuits)」と呼び、免疫学、神経生物学、腸内細菌学を専門とする研究者がそれぞれの分野の枠を越えて議論できる場を提供した。当日は、英国内の様々な研究機関に所属する100人以上の研究者や学生が参加し、新しいアイデアや研究課題を共有した。日本からは、粘膜免疫学を専門とする3人の研究者が参加し研究発表を行った。また、芸術と科学の融合をテーマとした活動の一環として、英国で活躍するアーティスト、Jasmine Pradissitto 博士

(<https://www.pradissitto.com>) によるアート作品の展示を行った。作品の一部は、本シンポジウムの主題からインスピレーションを受けたものを含んでおり、アートとサイエンスと空間デザインの一体化を試みた。以下に日本からの参加者によるレポートを記載する。また、当日のプログラムは下記リンクより閲覧可能である。

プログラム: <https://www.crick.ac.uk/whats-on/jspcs-crick-symposium-on-gut-circuits>



The Francis Crick Instituteのエンタランスにて発表者と共に。左から、磯部 順哉 (慶應義塾大学博士課程学生)、倉島 洋介 (千葉大学准教授)、筆者、Gerard Eberl (Group leader, Pasteur institute)、澤 新一郎 (九州大学教授)

The Francis Crick 研究所では様々な訛りの英語が飛び交う。私の Japanese English もここでは幾分許容されるであろう、と数枚のイントロダクションスライドから始める。16世紀の東洋図には詳細な日本地図が登場する。詳細に描かれた九州地方の海岸線が、当時の日欧間の密接な文化交流を如実に物語っている。おもむろに本題にはいる。10年前のパリ留学中に発見した腸管内3型自然リンパ球 (ILC3) に関する研究の続報である。目の前には元ボスであるパスツール研の Gerard Eberl をはじめ、Manchester 大学で独立したばかりの Matthew Hepworth、Crick 研究所で腸管環境センサー分子を専門とする Brigitta Stockinger らがならび、様々な色の腫を一斉に感じる。

日本に帰国したのは2011年。東日本大震災の直前であった。日本に帰っても私には独立して研究を行うポジションも、研究費もなかった。その後、研究場所を変え、細々と研究費を獲得しつつ、ようやく九州大学で教授職を得ることになった。我々が

らよく続けられたなと思いながら目的、方法、結論、考察とスライドを進めてゆく。いつも通り、原稿はない。スライドを見ながら、語り口調で進める。今回の発表はILC3機能の新たな発見にとどまらない。細胞機能解析法の新提案であり、いかなる分野の研究にも応用可能だ。果たして、私の意図は伝わったのだろうか？ 明るさを取り戻した会場には笑みを浮かべる Gerard の顔を見つけることができた。彼はプレゼンが悪いと苦虫を噛み潰したような顔をする。今回は良かったようだ。Brigitta からの質問に答える。リーズナブルな質問。伝わっていて良かった。翌日の feedback discussion でもなかなかの好評であったことを伺い知ることができた。そして何より、東洋古地図がオランダ製であったことまで気づいていた Matthew はさすがだ。脱帽。

九州大学 生体防御医学研究所 システム免疫学統合研究センター  
澤 新一郎 (SHINICHIRO SAWA)

## Recent Activities

今から思い起こすこと20年近く前の学生時代、私はヨーロッパ旅行でロンドンに数日間滞在しました。ロンドンからパリに移動する旅程を組んでいたのですが、ストで地下鉄が止まってしまうという海外ならではのハプニングに見舞われ、予約していたフランス行きのバスに乗り遅れ、結果的に冬の寒い時期にヴィクトリア駅構内で野宿をした青春の苦い経験。駅員に、可能なら電車の中に入れてあげるからバスに聞いてくると温かい言葉をかけられ、期待を持ったまま結局は朝を迎えたことも今となっては笑い話です。しかも滞在中は大規模改修工事中の大英博物館に入館できずじまいという、まるでツキに見放されたような街が私にとってのロンドンの印象でした。

長い月日が経ち、この度 JSPS London-Crick 研究所主催の本シンポジウムに尾畑先生からお声がけいただき、再びロンドンの地を訪れる機会を得ました。シンポジウムは、タイトルどおり腸管を中心とした免疫系、神経系、間葉系、上皮系といった臓器を取り巻く様々な構成要素による制御について最新の知見が発表され、どれも非常にインパクトのある研究内容でした。特に、20年ほど前から現在までホットピックスである粘膜免疫研究に、この10年間で目覚ましい進歩を遂げている腸内細菌研究、3年ほど前から再注目されるようになった腸管神経叢・脳腸相関研究が加わり、それぞれ第一線で研究をされている研究者の発表が並び、層の厚い粘膜免疫研究の新機軸を窺い知ることができました。

私は、腸管の“accessory organ”でもあり、消化を担う「膵臓」に着目して行った研究内容についての発表させていただきま

した。腸管粘膜を介した感染症に対して、IgA や粘液といった腸管組織内からの生体防御因子の重要性は広く認知されていますが、腸管外組織・臓器から腸管内に消化酵素と共に流れ込む「抗菌物質」が膵臓から出ており、生体防御・抗炎症での重要な役割を果たしているという新しい知見を得ました。現在論文投稿中の内容ではありますが、本シンポジウムで発表をさせていただきました。

2016年12月より文部科学省卓越研究員制度に採択いただき、現在、千葉大学医学研究院にてイノベーション医学研究室を主催しております。これまでの粘膜免疫研究から派生し、免疫系・間葉系・神経系の「相互作用」についての研究を進めており、疾患治療を目指した基礎研究を行っています。まだ駆け出しの段階ですが、研究メンバーと共に新しい研究成果を得るために日々奔走していますので、興味がある方はぜひ研究室のホームページ（<http://www.m.chiba-u.jp/class/innovativemed/>）を覗いてみてください。

ところで、これまでツキのなかったロンドンですが、非常に充実した内容のシンポジウムに参加させていただいたことや、Crick研究所の研究者との意見交換等、今回はとても良い滞在になりました。末筆になりましたが、参加の機会を与えていただきました尾畑佑樹先生、JSPS London の上野信雄センター長をはじめ、センターの方々には厚く御礼申し上げます。

千葉大学大学院医学研究院 イノベーション医学  
倉島 洋介 (YOSUKE KURASHIMA)

この度は、JSPS-Crick Symposium on Gut Circuits に招待していただき大変光栄に存じます。オーガナイザーの尾畑 佑樹さん並びに日本学術振興会の方々と、運営に携わった Crick 研究所の方々に心より御礼申し上げます。

この度のシンポジウムで発表をさせていただき、海外での初めての発表だったため大変緊張したのと同時に、とても貴重な経験になりました。発表後は多くの方々から質問やコメントをいただき、日本での学会発表の時には指摘されなかった点もあり、これからの研究活動において参考になりました。また、海外の方の、発表後に積極的に質問する姿勢には感銘を受けました。

このような姿勢を見習いつつ、自分はまだまだ英会話能力やプレゼンテーション能力について未熟なところが多々あるため、今後はそれらを改善していきたいと思います。シンポジウム後はCrick 研究所の研究者の方々とディスカッションをさせていただき、日頃研究している免疫の分野だけでなく神経系の分野についても知ることが出来た良い機会となり、自分自身の知識の幅が広がりました。今後は、この経験を活かして、研究活動により一層勤しんでいきたいです。

慶應義塾大学薬学部 生化学講座  
磯部 順哉 (JUNYA ISOBE)



シンポジウム会場にて(ランチタイムディスカッション中)



Jasmine Pradissittoによるアート作品の前で。  
左: Jasmine Pradissitto博士

# Voice!

## from Alumni member

### Vol.15 Professor Timon Screech



**Timon Screech** is Professor of the History of Art at SOAS, University of London. He has also studied at several institutions in the EU, Japan and the USA.

He is the author of some dozen books on the visual culture of the Edo period. His PhD was published as **The Lens Within the Heart: The Western Scientific Gaze and Popular Imagery in Later Edo Japan** (CUP 1996).

His best-known work is **Sex and the Floating World: Erotic Images in Japan, 1700-1820** (Reaktion, 1999; second, expanded, 2009).

His numerous writings have been translated into French, Japanese, Korean, Polish and Romanian.

I have been engaged with Japan since I became obsessed with country as a teenager. Japan was not then the global presence it is today, and living in rural Oxfordshire in the 1970s we were hardly aware of the place, other than from the trinkets that came out of Christmas crackers, or perhaps typewriters (not that many people owned them). My parents were big readers and one rainy day I came across a book on their shelves which I took out to look at. I recall the opening lines still, 'in the court of an ancient prince, the time it matters not when...' This was the *Tale of Genji* in Arthur Waley's famous translation of 1921-33 – the only translation then available (now there are several). I asked my father about it, and he told me he had in fact been in Japan was a serviceman, and had even spent his 21<sup>st</sup> birthday in Shimonoseki. I did know it generally, but in those days many people's fathers had war stories, and to be honest we found them boring. I should have asked more, though I didn't. But I did at least listen when my father said had learned some Japanese and if I was interested he would teach me. I took him up on this, and for several years we went through *Teach Yourself Japanese* together. It was fun for him to relive his youth in Japan, mostly spent in Tottori, and it was eye-opening for me.

In due course, I decided to take Japanese at university. There were not many places offering it, so I got in to Oxford. In my first year there the Royal Academy held an astonishing show of Edo art called the Great Japan Exhibition. I travelled to London several times to see it, and decided that I wanted to become a specialist in Japanese art. That was easier said than done, since

no European university taught the subject. However, it was available at PhD level in the USA. I applied without thinking I had a chance, but then came two unexpected strokes of luck. One was that the pound was very low against the dollar, so when I declared our family assets (which weren't much anyway) we appeared almost destitute, making me eligible for full funding. That didn't mean I was admitted, but the second stroke of luck was that an extremely able student from the UK had recently been admitted to study Japanese art at Harvard, and had excelled. That person's tutor erroneously thought I would be off the same block, so there I was: admitted with a scholarship.

On graduation six years later, by another stroke of luck, SOAS created a post in Japanese art, which I applied for and secured. I've been there since 1991 – it will soon be 30 years.

My PhD studies and my work ever since have sought to engage with Japanese visual culture, that is, with objects recognised as 'art', but also those not regarded as such, such as applied objects, or data items such as maps or illustrated books. A division between 'art' and something lower would have been understood in Japanese history, but they did not draw the boundaries as we do, and our categories would seem arbitrary to them. The Royal Academy show's legacy was such that I never strayed from the Edo Period, which is anyway a long and rich time, with a huge variety of issues to engage with. But in the 1980s, the period was always defined by the word *sakoku* (national isolation). I always suspected this was simplistic, and so



*Voice! from Alumni member*

Voice! from Alumni member

the other defining feature of my work has been to see Edo internationally. This might be by addressing 'Dutch Studies' (*rangaku*), or more interestingly, in my view, by looking at subliminal and submerged information. Only later did I discover that the very term 'national isolation' did not exist in the Edo Period, and that '*sakoku*' is actually a 19th century translation from Dutch, which was itself a translation from English, translated from German, as written by a traveller to Japan c. 1700. Of course, Japan in the Edo Period was not wide open, but then where was at that time?

Thanks to various funding bodies I have been able to make frequent research trips to Japan over the years. The JSPS funded a period attached to Waseda University, where I worked with Professor Tan'o Yasunori, whose own research and writing deals with many aspects of Japanese Art. I had met Professor Tan'o before, but the ability to spend an entire year with him, to meet his students and to follow his seminars, as well as taking advantage of Waseda's excellent library, was an exceptional treat. Professor Tan'o and I have stayed in frequent touch, though sadly this is his final year before retirement. This summer we will hold a valedictory symposium for him in Tokyo, and then he will leave Waseda in spring 2020. We all hope and

expect that Waseda will find a worthy successor, to continue his legacy and further Japanese art studies internationally.



Investigating Japanese art in the British Museum

## JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI)

### Please join the JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI)!

As a former JSPS Fellow, we would like to ask you to join the JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI). Our Alumni Association was established in 2003 and carries out a number of activities throughout the UK and RoI with numerous benefits for members. One of them is "The JSPS London Symposium and Seminar Scheme." The aim of this scheme is to provide support for members holding a symposium or seminar and to create high quality collaboration in cutting edge/ internationally competitive areas at institutional or departmental level between research institutions in the UK or RoI and Japan. Under this scheme, JSPS London will partially support the following matters\*:

\*The detailed support is subject to change.

1

Costs for inviting  
symposium/ seminar  
speakers from Japan

2

Costs for hiring a venue,  
printing materials,  
advertising and so on\*

3

Strategic support to help  
advertise and organise  
the event.

The application details of this scheme will automatically be e mailed to registered Alumni members during our next call. For further information please contact JSPS London by email at [enquire@jspm.org](mailto:enquire@jspm.org). Again, this is exclusively open to the JSPS Alumni members.

So why not join us today?

**JSPS**  
UK & IRELAND

#### Joining us

Simply register your membership here

[http://www.jspm.org/alumni\\_about/](http://www.jspm.org/alumni_about/)

Once registered you will receive an ID number and password to access the Alumni Association web pages and can start networking.

## | Recent Activities from Alumni members

### “First partnership for Lancaster University with a Japanese University”



Lancaster University has signed in April 2019 a ‘memorandum of understanding’ with Nagasaki University. The initiative was initially supported by a 2016-JSPS Bridge Fellowship to Dr. Gabriela Toledo-Ortiz Lecturer from the Lancaster Environment Centre, who was hosted by Prof. Hideki Nakayama in the Nagasaki School of Environmental Sciences. The bilateral agreement is to explore shared research in environmental challenges and in other areas of potential collaboration such as social sciences and medicine. Lancaster University’s Environment Centre is home to one of the largest groups of environmental scientists in the world, while Nagasaki is one of the few Japanese Universities with a trans-disciplinary environment program bringing across natural and social sciences.

The two universities hope to explore student and staff exchange programs, joint research applications, student summer schools and in the future joint degree agreements.

Lancaster University Vice Chancellor Professor Mark E. Smith said: “Lancaster University is a research-intensive UK top-ten University, gold-rated for our teaching excellence. We are a thriving global community of researchers and teachers with a strong international ethos and we very much welcome Nagasaki University into that community and look forward to the benefits of shared working for our researchers and students.

To launch the initiative, a JASSO-funded exchange program for students interested in environmental science is being introduced this summer. Students from Lancaster University travelled this June to Japan for 2 months to carry out research and attend an international summer school at Nagasaki University, which includes cultural and field visits as well as cross-disciplinary seminars and group work. Students will work on research projects, which will be jointly supervised by academics from Nagasaki and the Lancaster Environment Centre, spanning the natural and social sciences, including bio-waste recycling, the diet of the urban honey bee, water quality and economic analysis of environmental and energy policy. In return four undergraduate students from Nagasaki will participate in the Lancaster Environment Centre summer school in July.

Dr. Toledo-Ortiz, a plant scientist from the Lancaster Environment Centre, said: “Japan boasts the third highest

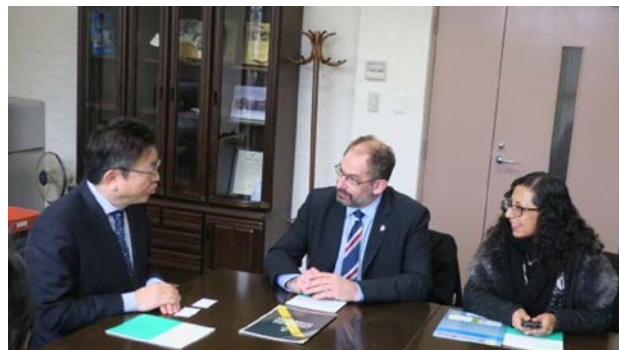
number of scientists and engineers per capita in the world. In Lancaster we aim to work across disciplines, and societal and national boundaries, to address the major environmental challenges facing the world”.

Prof. Kimihiro Yamashita, Dean of the Nagasaki University’s Faculty of Environmental Sciences, said: “We share common aims with the Lancaster Environment Centre in solving global environmental problems and training our students as environmental professionals in a transdisciplinary environment for the benefit of global society.”

Prof. Kirk Semple, Director of International Engagement at the Lancaster Environment Centre, said: “The breadth of expertise across natural and social sciences at Nagasaki University is mirrored at Lancaster University. This complementarity offers a fantastic opportunity for undergraduate and postgraduate students from both universities to expand their teaching and learning experiences, while offering researchers the chance to develop exciting research collaborations that we plan to explore in the future”

“A partnership with Nagasaki University is a wonderful opportunity for our students and staff” said Dr Toledo-Ortiz. “Nagasaki University has expertise covering a broad range of subjects including ecology, volcanology, marine sciences and water and coastal management. It also has unique research facilities in the nearby Unzen volcanic park and the coastal bay of Nagasaki prefecture. Lancaster students will have the chance to gain international research experience, while soaking up the culture of Japan and giving their CV a boost. This first program aims to open the door for bilateral research collaborative initiatives between Nagasaki and Lancaster, and to seed further student and staff exchanges, and research collaborations to strengthen the UK-Japan bilateral exchange”.

*Written by Gabriela Toledo-Ortiz and Alison Cahn. Lancaster University.*



Nagasaki University Vice President, Prof. Isao Shimokawa meets with Prof. Kirk Semple and Dr. Gabriela Toledo-Ortiz from Lancaster University.

● Events organised/supported by JSPS London  
from March 2019 to June 2019 ●

◆ **Symposiums & Seminars**

- 6-7th March  
International Symposium on Virus Infection and Host Response (INFECTION + IMMUNITY) × EVOLUTION  
supported by the JSPS London
- 30th April  
Pre Departure Seminar & JBUK Meeting at JSPS London
- 11th June  
Gut Tissue Circuits Symposium at Francis Crick Institute
- 12th June  
Final Core-to-Core symposium in University of York

◆ **JSPS Programme Information Event**

- 5th May 2019  
Japan Information Day at Embassy of Japan

● Future events organised/supported  
by JSPS London ●

◆ **Symposiums & Seminars**

- 20th August  
International comparison and collaboration in medical sociology: research initiatives,  
challenges and future prospects at Cardiff University
- 6-7th September  
Technology-supported Community Care in Japan and Ireland at University College Dublin

◆ **JSPS Programme Information Event**

- 8th July 2019  
Programme information event at University of Sussex



# JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

## Application Schedule for FY2019/20

### Fellowship Programmes

\*The Pre/ Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

| Programmes                           | Suitable Applicants      | Apply to            | Recruitment       | 2019 |                                |      |     |     |      | 2020~                   |     |             |             |                   |               |                   |                   |
|--------------------------------------|--------------------------|---------------------|-------------------|------|--------------------------------|------|-----|-----|------|-------------------------|-----|-------------|-------------|-------------------|---------------|-------------------|-------------------|
|                                      |                          |                     |                   | Jul  | Aug                            | Sept | Oct | Nov | Dec  | Jan                     | Feb | Mar         | Apr         | May               | Jun           | July              | Later             |
| Summer Programme                     | Pre/Postdocs             | British Council TYO | -                 |      |                                |      |     |     |      | TBA                     |     |             |             |                   | Jun-Aug (TBA) |                   |                   |
| Pre/ Postdoctoral Short Term (1-12m) |                          | JSPS TYO            | 1st Call (FY2020) |      |                                |      | 4th |     |      |                         |     |             | Apr-Mar2021 |                   |               |                   |                   |
|                                      |                          |                     | 2nd Call (FY2020) |      |                                |      |     |     | 17th |                         |     |             |             |                   |               | Aug-Mar2021       |                   |
|                                      |                          |                     | 3rd Call (FY2020) |      |                                |      |     |     |      |                         |     |             |             | 5th               |               | Jan2021- Mar2021  |                   |
|                                      |                          | JSPS LON            | 1st Call (FY2020) |      |                                |      |     |     | TBA  |                         |     |             |             | May-Mar2021 (TBA) |               |                   |                   |
|                                      |                          |                     | 2nd Call (FY2020) |      |                                |      |     |     |      |                         |     |             |             |                   | TBA           |                   | Nov-Mar2021 (TBA) |
| Postdoctoral Standard (12-24m)       | Postdocs                 | JSPS TYO            | 1st Call (FY2020) |      |                                | 6th  |     |     |      |                         |     |             | Apr-Sept    |                   |               |                   |                   |
|                                      |                          |                     | 2nd Call (FY2020) |      |                                |      |     |     |      |                         |     |             | 8th         |                   |               | Sep-Nov           |                   |
|                                      |                          | Royal Society       | -                 |      |                                |      |     |     |      |                         |     |             | TBA         |                   |               |                   | Sep-Nov (TBA)     |
|                                      |                          | British Academy     | -                 |      |                                |      |     |     |      | TBA                     |     |             |             | Apr-Nov (TBA)     |               |                   |                   |
| Invitational: Long Term (2-10m)      | Mid Career to Prof level | JSPS TYO            | -                 |      |                                | 6th  |     |     |      |                         |     | Apr-Mar2021 |             |                   |               |                   |                   |
| Invitational: Short term (14-60d)    |                          |                     | 1st Call (FY2020) |      |                                | 6th  |     |     |      |                         |     |             | Apr-Mar2021 |                   |               |                   |                   |
|                                      |                          |                     | 2nd Call (FY2020) |      |                                |      |     |     |      |                         |     |             |             | 8th               |               |                   | Oct-Mar2021       |
| BRIDGE Fellowship                    | for Alumn Members        | JSPS LON            | -                 |      |                                |      |     |     |      |                         | TBA |             |             |                   |               | Jul-Mar2021 (TBA) |                   |
|                                      |                          |                     |                   |      | Application period or deadline |      |     |     |      | Fellowship staring time |     |             |             |                   |               |                   |                   |



Application period or deadline



Fellowship starting time

### International Collaborations

\*The Following schedule is for the researchers on the Japanese side.

| Programmes                      | Suitable Applicants       | Apply to      | Duration                               | 2019 |     |                |     |     |     | 2020~ |     |     |                  |     |                   |       |
|---------------------------------|---------------------------|---------------|----------------------------------------|------|-----|----------------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|------------------|-----|-------------------|-------|
|                                 |                           |               |                                        | Jul  | Aug | Sep            | Oct | Nov | Dec | Jan   | Feb | Mar | Apr              | May | Jun               | Later |
| JSPS London Symposium & Seminar | For Alumni & JBUK members | JSPS LON      | Symposium: 1-3 days<br>Seminar : 1 day |      |     |                | TBA |     |     |       |     |     |                  |     | Jun-Feb2021 (TBA) |       |
| Bilateral Programme [A]         | Research Groups           | Royal Society | Joint Project: Max 2 yrs               |      |     | 25th (UK side) |     |     |     |       |     |     | Apr-Mar2022(max) |     |                   |       |
| Bilateral Programme [B]         |                           | JSPS TYO      | Joint Project: Max 2 yrs               |      |     | 4th            |     |     |     |       |     |     | Apr-Mar2022(max) |     |                   |       |
|                                 |                           |               | Joint Seminar: Max 1 week              |      |     | 4th            |     |     |     |       |     |     | Apr-Mar2021      |     |                   |       |
| Core to Core Programme          | Institutions/ departments | JSPS TYO      | Max 5 yrs                              |      |     |                | 1st |     |     |       |     |     | Apr-Mar2025      |     |                   |       |



Application period or deadline



Project starting time

\*When you apply to JSPS Tokyo, please notice that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

## Programme Contact Information List

### Summer Programme

British Council Tokyo: <https://www.britishcouncil.jp/en/programmes/higher-education/support-researchers>

### Pre/ Postdoctoral Short Term

JSPS Tokyo : <http://www.jsps.go.jp/english/e-oubei-s/applguidelines.html>

JSPS London: <http://www.jsps.org/fellowships/2018/02/postdoctoral-fellowship-short-term.html>

### Postdoctoral Standard

JSPS Tokyo : <http://www.jsps.go.jp/english/e-ippan/applguidelines.html>

The Royal Society : <https://royalsociety.org/grants-schemes-awards/grants/jsps-postdoctoral/>

The British Academy: <https://www.thebritishacademy.ac.uk/programmes/jsps-postdoctoral-fellowship>

### Pathway to University Positions in Japan (suspended)

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-teicyaku/applguidelines.html>

### Invitational: Short, Long, Short S

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-inv/application.html>

### BRIDGE Fellowship

JSPS London: [http://www.jsps.org/alumni\\_jbuk/2018/05/bridge-fellowship.html](http://www.jsps.org/alumni_jbuk/2018/05/bridge-fellowship.html)

### JSPS London Symposium/Seminar Scheme

JSPS London: [http://www.jsps.org/alumni\\_jbuk/2018/05/jsps-london-symposiumseminar-scheme.html](http://www.jsps.org/alumni_jbuk/2018/05/jsps-london-symposiumseminar-scheme.html)

### Bilateral Programme

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html>

### Core to Core Programme

JSPS Tokyo: <https://www.jsps.go.jp/english/e-c2c/index.html>

## Follow us ...

For Japanese researchers in the UK/ 在英日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けいたします。対象は、英国の大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>

JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<http://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom

Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669

E-mail : [enquire@jsps.org](mailto:enquire@jsps.org) | <http://www.jsps.org>

JSPS London ニュースレター

監 修: 上野 信雄

編 集 長: 糸井 智香

編集担当: 横山 芙季